

現代日本文学における魯迅の影響への一考察 ：魯迅「祝福」と山田宗樹『嫌われ松子の一生』の 比較を中心に

下地 慎栄

0 はじめに

日本の中学国語教科書のすべてに魯迅の「故郷」が採用されて40年^(注1)、魯迅は日本においても国民文学の地位を確立したと言われる。しかも、外国人作家の掲載がただでさえ少ない中、アジア人では魯迅だけであり、参考欄ではなく本文に全文掲載されている。^(注2) また、日本への留学経験、日本文学への傾倒、2人の弟の妻が日本人であるなど、彼と日本との関係は深い。彼の作風が多く日本人に受け入れられてきたことは、このことと無関係ではあるまい。実際、太宰治の『惜別』はもちろん、松本清張、大江健三郎、村上春樹など著名な文豪たちへの魯迅の影響が指摘されてきた。^(注3) それならば、ごく最近に発表された日本文学作品の中にも、魯迅の影響が見られるものが、あって然るべきであろう。そこで、ここでは、魯迅「祝福」と現代日本の人気作家である山田宗樹『嫌われ松子の一生』を比較検討し、魯迅作品の現代日本文学への影響の一考察としたい。

なお本稿における両作からの引用は、光文社『酒楼にて／非行』（2010）、幻冬舎文庫『嫌われ松子の一生』上・下（2004）による。

1 両作品の概要

1-1 魯迅「祝福」概要

「祝福」は魯迅の第二小説集『彷徨』の巻頭に収められた作品である。篇末には1924年2月7日の日付がある。上海・商務書館発行「東方雑誌」第21巻第6号（1924年3月25日発行）で初めて発表された。^(注4)

昨今、中国では高校教科書からの魯迅作品の削除が議論を呼んでいると

いうが、『産経新聞』の記事に「人民出版社の高校教科書に残されたのは、魯迅の少年時代や故郷の人々を描写した「祝福」など、批判精神よりも文学性の濃い作品となっている。」^(注5)とあるように「阿Q正伝」など日本での知名度の高い作品が外された一方で、生き残った作品の代表と言える。教科書に収録されているだけではなく、1956年に中国初のカラー映画として映画化され、主人公の祥林嫂は中国人なら誰もが知る存在となっているようである。以下に、物語の概略を示す。魯迅著・藤井省三訳『酒樓にて／非攻』を参考に筆者がまとめた。

主人公の「祥林嫂」は10歳下の夫（衛祥林）を失い、姑に転売されることを恐れて逃げ出し、斡旋者（衛ばあさん）の紹介で魯鎮の地主（語り手「僕」の叔父・四叔）の家で下女として働き始め、普段も、重要な儒教祭祀「祝福」の時期にも、とてもよく働いた。ところが姑の策略で拉致され花嫁として売られてしまう。結婚式でとっさに自殺をはかると死ねなかった。しかし、2番目の夫（賀老六）は気のいい男であり、子供もでき、束の間の幸せが訪れた。だが、夫が病死し、息子（阿毛）も狼に喰われたため、夫の財産を狙う義兄に家から追い出されてしまう。再び斡旋者により同じ地主の家で働くことになったが、再婚したことで汚らわしく思われ、祝福など祭祀の準備はさせてもらえない。辛い身上話を、ことあるごとに周囲の者に対して吐露しようとするが、周囲は最初のうちは同情するものの、何度も聞くと煩わしくなり、祥林嫂を無視し嘲笑するようになってしまう。その理由がわからない祥林嫂は仏を信じている同僚の一人（柳媽）の言葉を真に受けて、事態の打開のため財産のほぼすべてをかけて鎮の廟に敷居を寄進する。しかし、周囲の態度は何も変わらず、祥林嫂は絶望して、木偶の坊のようになったため、地主の家から追い出され、乞食となって、祝福の時期に野垂れ死にする。

そして、もう一人の主人公が帰郷中の「僕」^(注6)で、祥林嫂の死の前日、乞食となった彼女にしばらくぶりに遭遇し「死後の魂」「地獄の存在」「死後に家族に会えるか」など3つの質問をされるが、答に窮し「よく知らない」と言って立ち去ってしまう。学のある彼は「よく知らない」という言

葉の効用を意義付けたりして自己正当化を図ったり、近隣市の名物料理フカヒレのことを考えたりするものの、つい彼女の事を考えてしまう。次の日、彼女の死を知らされ彼女の人生を総括しだすのであった。

1-2 山田宗樹『嫌われ松子の一生』概略

『嫌われ松子の一生』（2003）は人気作家・山田宗樹による発行部数120万部のベストセラー小説である。2006年には中島哲也監督により映画化された。ストーリーは原作に忠実に、映像や演出方法に大胆な工夫を施したことで、原作者をして、映画版のシナリオに感涙させ、「この映画の原作者であることを誇りに思います。」と絶賛せしめたほどの完成度である^(注7)。興行的にも大ヒットし、主演女優の中谷美紀は日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞した。これらのことから、同作の日本での知名度は高いと思われる。以下は筆者が概要をまとめたものである。

福岡から上京してきた大学2年生・笙のアパートに突然父が訪れる。手には御骨を抱えている。それは伯母である松子のものであった。それまで松子の存在を知らされてこなかった笙は、父に遺品整理を頼まれ、しぶしぶ松子のアパートへ行く。荒れ放題の部屋で彼女の成人式の時の写真を見つけたことをきっかけに、アパートの隣人や、松子の元教え子かつ元恋人の洋一、友人の恵など、生前の松子を知る人々との対話などを通して、松子の人生を追っていく。

福岡の中学教師である松子は、修学旅行中のお金の紛失事件で、犯人である教え子の龍洋一を安易な気持ちでかばってしまったこと、それ以前に校長からセクハラを受けていたことなどで、教職を追われてしまう。父に知られることを恐れた松子は、すべてを捨てて故郷の町を去る。その後、ウエイトレスをするうちに、作家志望の無職の男で太宰治の転生者と称する八女川と知り合い、彼の生計を支えることになる。八女川が突然の自殺を遂げると、彼の友人でライバルでもあった岡野と不倫関係になるが、それが岡野の妻に露見したことで、あっさり捨てられてしまう。心の支えを失ったことで、風俗嬢となる覚悟を決める。持ち前の勤勉さを発揮し、店

のナンバーワンとなる。その後、客であった小野寺にプロ意識を見込まれ、彼とともに滋賀の雄琴に移る。しかし、小野寺に稼ぎを別の女に貢がれ、もみ合いの末、彼を殺してしまう。自殺を決意し、東京の玉川上水に行ったところ、理容師の男寡・島津と出会い、彼の店に転がり込み内縁関係となるが、その幸せも束の間、逮捕される。刑務所生活ではのちに友人となる恵と出会い、模範囚として美容師の資格を得る。島津が待っていることを信じて帰宅するも、彼にはすでに妻子がおり新しい家庭を築いていることを窓越しに目の当たりにし、何も言わずに身を引く。美容室で働きながら孤独に暮らしていた松子は、客として来た恵と再会する。時期を同じくして、かつての教え子でヤクザとなっていた洋一とも再会を果たす。家庭を持つ幸せそうな恵を見て孤独感を深めていた松子は、洋一と恋仲になる。仕事も放り出し、暴力的な愛に溺れていく。心配した恵の助言を突っぱね、ますます洋一に盲従していく。麻薬の売人で使用者でもあった洋一が逮捕されても、松子は彼の出所を一途に待ち続けるのだが、出所の迎えに行ったその場で拒絶され絶望する。食べることや寝ること以外は何も手につかなくなりアパートに引きこもり自堕落な生活を送る。別人のように太り、浮浪者同然の容姿から誘拐犯と間違えられるなどして疎まれ、アパートを追われる。別のアパートでも、すさんだ生活は変わらず、やがて精神を病むようになり、荒川を眺めては独り言を言うなど廃人同然となり、隣人からは「嫌われ松子」と陰で呼ばれるようになる。一度行った病院で、知人の見舞いに来ていた恵と再会する。変わり果てた松子を心配し専属の美容師を探していると伝える恵は連絡先の書いた名刺を松子の手に握らせる。以前と変わらない恵に嫉妬した松子は公園でそれをくしゃくしゃにして捨ててしまう。その日の夜、無意識にハサミを動かす動作をする自分に気付いた松子は名刺を探しに公園に行き、若者集団に知らないかと聞いたところ、暴行され殺されてしまう。(映画では、職業意識が復活していたからか元中学教師の松子は、夜遅くに遊んでいる中学生集団に帰るように注意してしまつてバットで一撃されて野垂れ死にしてしまう。)

2 物語構造の類似

2-1 時代と社会とを異にする女の〈パラレルな〉転落人生——祥林嫂と松子

両作ともに、真面目で勤勉な女性主人公の転落の一生を描いている。祥林嫂は26歳から40歳前後での悲劇的な死まで、松子は23歳から53歳での、やはり悲劇的な死までである。40前後と53歳と差があるが、時代背景（清末民初の中国と昭和平成の日本）による寿命や加齢の推移を加味すればほぼ同じと考えていいだろう。また、両者にはその時代背景を異にしながらも、少女時代から死に至るまでの人生の歩み、出来事（その順番を含めて）、パーソナリティなどにパラレルな類似点を多く見出せるのである。以下、物語の展開に沿って考察してみたい。

2-1-1 少女時代から棄郷まで——存在理由としての絶対的男性像、イエからの逃亡

両作とも、主人公の少女時代にはほとんど触れられていないが、それぞれ夫、父という絶対的な存在だけを拠りどころにして生きてきた孤独者であったことが推測される。

祥林嫂の少女時代については、いくつかの先行研究に示唆的な記述が見られる。その中に「童養媳」と呼ばれる制度への指摘がある。

夫が「彼女より10歳若い」ということが、彼女のより過酷な少女時代を刻印しているのだ。中国の農村では、かつて「童養媳」という習慣が幅広くあった。赤ん坊の息子のために、まずは子守として女の子の買い取り、息子が成人したら嫁にするというものである。人身売買と売買婚の一例でもある。こうしてできた夫婦の年齢差は10歳以上になるのが通例で、むしろ嫁姑のほうが歳が近かった。姑が支配的な権限を持ったため、そこで嫁姑の関係はしばしば険悪なものとなった。テキストには明示されていないが、祥林嫂がその「童養媳」である可能性はかなり高い。祥林嫂は幼い頃に売られ、姑の厳しい管理の

下で育てられたのだろう。

(代田智明『魯迅を読む』東京大学出版会 p.117)

すなわち、こうした女性が道具とみなされた旧体中国社会的な価値観を背景に、祥林嫂は、最初の夫が彼女に愛情を抱いていたかどうかは別として、少なくとも、将来の家父長たる夫の存在だけを拠りどころにして生きてこなければならなかったということはいえよう。なお、祥林嫂の実際の故郷が衛家山（最初の夫と同じ村）であったかは記述されないが、そうでなくとも幼少時に売られてきたとすれば、故郷と言って差し支えないものとした。

一方、松子は、病弱な妹・久美により父の愛情を独占されているとの意識をもっており、父の注意を向けるために、オール5の成績を取り続けるなど勉学に励んできた。昭和45年前後に地元福岡の国立大学を卒業し、すべて父の希望通りに生き、父と同じ公務員である教師となる。絶対的な父の存在だけを拠りどころにしてきた姿が想像される。ファザーコンプレックスと言えらるだろう。これは、その後の精神面で極度に男性に依存した人生に大きく影響していると思われる。また、その背景には昭和日本社会の事情が存在する。

この田舎社会で、事件を起こして学校を辞めさせられた教師が、どうやって生きていけるというのか。いや、学校を辞めるのは、かまわない。しかし、それを父に知られることが耐えられない。(中略)わたしの十五年に及ぶ努力は、無駄になってしまう。(pp.167-168、上)

我が家では、外から帰ったらまず、仏前に報告することになっている。決めたのはもちろん父だ。(pp.127-128、上)

上記からは、すぐに噂の広まる閉鎖的な「田舎社会」と家父長制的価値観という祥林嫂の時代の魯迅や中国農村と共通する構造が見られる。また、

作中では松子の母親の様子やセリフはほとんど描かれぬ。母親に松子が金を貸してくれるように頼む場面において、割烹着姿の母親が、

「お父さんに聞いてからでないかね」(母)

「お父さんには言わないで」(松子)

「そんなこと言ったって……やっぱりこういうことは、お父さんの許可をもらわなきゃ。この家の主^{あるじ}なんだから」(母) (p.130、上 (人名) は筆者による追加)

と対話する様子が描かれるほかは、帰宅した父の鞆や上着を部屋に運ぶ様子が寸描されるくらいであり、貞淑な母親像以外は、むしろ徹底的に隠されている。このような表に現れない母親像により家父長制的な雰囲気強調する狙いがあると思われる。(ちなみに映画版では母親の姿は一切出てこない。) すなわち、祥林嫂の状況を作り上げた尊社会や家父長制が、昭和の日本にも生きており、松子の転落の社会的要因の一端となるのである。

そして、祥林嫂は夫の死により、松子は教職を追われ父の愛情が失われた(と思い込んだ)ことで、すなわち両者ともに生きる拠りどころを失ったことで故郷から逃げ出すのであった。それは、儒教システムとしての「イエ」からの逃亡を意味する。

2-1-2 青年期——勤勉と半自立、自殺未遂と東の間の幸、社会的逸脱者のスティグマ

その後、祥林嫂は四叔の家で給料を得て働くこととなる。祝福の行事など下働きで、持ち前の勤勉さを発揮し、男並みの働き手として評価され、自分の居場所を見つけていく。松子も精神的には様々な男へ依存しながらも、風俗業の技術追求で、持ち前の勤勉さを発揮し、経済的に自立し自分の居場所を見つけていく。風俗店ではナンバーワンにのぼりつめ、大金を手にするに至る。両者ともに、社会の底辺と見なされてしまう職業に就いていながらも、持ち前の勤勉さを発揮し、自立していた時期として共通している。

しかし、祥林嫂は姑たちに拉致され、貯蓄を奪われた挙句、山奥の村に嫁として売られてしまい、必死の抵抗の末、自殺未遂に至る。松子も男に裏切られ、預けた稼ぎを別の女に貢がれた挙句、もみ合いの末男を殺してしまい、自殺未遂に至る。そのような2人を救ってくれたのは、ともに気の優しい働き者の男であった。祥林嫂にとっては二番目の夫となり子供をもうけることとなる男・賀老六であり、松子にとっては初めて結婚・家庭を意識することになる理容師の男寡・島津である。両作中における男性登場人物で、冴えないながらも唯一善良な人物であるということも共通している。そして祥林嫂にも松子にも束の間の幸せが訪れるのである。

ところが、祥林嫂は二番目の夫をチフスでなくし、息子の成長を夢見て慎ましく生きるも息子は狼に喰われ、義兄により家を追われる。突然すべてを失い、たった一人で〈再婚をした不貞の寡婦〉の社会的スティグマを背負って生きていかなければならなくなったのであった。松子も逮捕され服役、出所後の結婚生活を夢見て模範囚として美容師の資格を得て帰宅するも、島津が新しい家庭を作り子供と幸せそうにしているのを窓越しに見つけ、何も言わずに身を引く。やはり突然すべてを失い、たった一人で〈前科者〉の社会的スティグマを背負って生きていかなければならなくなったのである。

2-1-3 中年期①——孤独ゆえの反復と盲目

祥林嫂は、再び四叔の家で下働きにつくが、以前のように敏捷には動けないばかりか、再婚歴を理由に不浄とみなされ祭器などに触れることも許されなくなった。その孤独ゆえ、事あるごとに、自分の不幸話をして、周囲の同情を確認することでカタルシスを感じ、なんとか生きていくのであった。しかし、はじめは同情していた周囲も、繰り返される同じ話に飽き、しまいには疎むようになる。

「あたしはバカでした、本当に」と彼女が話し出す。

「そうだよ、あんたが知ってたのは雪の日の獣は山奥で食べ物がなく
なり、村までくるということだけだったんだ」彼らはすぐ話の出鼻を

挫き、その場を離れるのだった。

(p.47)

松子は刑務所で身につけた美容師の資格でひっそりと暮らしていた。刑務所時代の友人の恵と再会するが、家庭を持つ彼女の幸と我が身とを比べて、さらに孤独を深めていたとき、教職を追われる原因となったかつての教え子で、ヤクザとなっていた龍洋一と再会し恋仲となる。愛情を確認する言葉を執拗に求め続ける松子を、はじめは優しくした洋一は次第にぞんざいに扱うようになる。映画版脚本では、原作に基づくこの流れが1シーンで忠実かつ端的に表現されており、以下に引用する^(注8)。

「離さないで」

「離さない……俺は……松子を」

「もう一度言って」雨はいつしか雪に変わる。抱き合う二人。

「俺は松子を離さない」

「もう一度」やがて朝日が差し込んで……

「離さない」

「もう一度」

「離さない」

「ねえ、もう一度」夜になりまた朝が来て……何日たっても離れない二人。

「俺は……松子を……」

「言って」

「離さない」

「ねえ、もう一度」

「しつこいぜっ!!」荒々しく起き上がり、服を着始める。

「どこ行くの？」

祥林嫂も松子も、深い孤独のために、ひたすら同情や愛を求め、その反復を他者がどう受け取るかを省みる余裕はもはや無くなっているのである。やがて、祥林嫂は嘲笑され、松子は暴力を振るわれるまでになってし

まう。そうして、不器用にしか生きられない彼女たちに、助言者が現れる。

2-1-4 中年期②——助言者としての柳媽と恵

祥林嫂は周囲の変化の理由に見当もつかない。あきれた同僚（柳媽）は祥林嫂に助言する。このままだと〈地獄〉で閻魔様に2人の夫のために身体をノコギリで切り分けられることになるから廟に敷居を寄進せよと。松子も洋一の変化にもかかわらず、彼を盲目的に求め続ける。心配した友人の恵が松子に助言する。このままだと〈地獄〉の底まで付き合わされることになるからすぐに別れろと。祥林嫂は何も答えなかったが内心恐怖に慄き寄進を唯一の希望とし猛進していく。松子は地獄でも洋一と一緒に行く覚悟があると啖呵をきり恵と決別し洋一のみを抱きどころ猛進していく。両作の〈地獄〉のイメージは大きく異なるものの、柳媽と恵の助言は、祥林嫂と松子の行動を決定づける物語上の鍵となる役割を果たすことで共通している。柳媽について先行研究^(注9)では「脅かした」という悪役的な評価が多いが、ほとんど言葉を発しない祥林嫂が柳媽に対しては言い返していることから本音を言い合える仲であるとも考えられる。また柳媽の言葉は当時一般に信じられていたこと^(注10)で、彼女は祥林嫂に自分の信じるところを伝えただけであって、彼女に悪意があったか否かの推定は難しい。助言に至るまでの対話は対照的な対応を示しており、柳媽と恵の性格は反対だとも思われるが、共通する逞しさ、強さが感じられる。

「あんたのこめかみの傷跡は、あのときぶつけたものなんだろう？」

（柳媽）

「ウウン」（祥林嫂）

「あたしは信じない。あんたほどの力があって本当に男に抵抗できなかったなん

て信じない。（中略）男の大力にかこつけてるんだ」（柳媽）

「ああ、あんた……あんたも自分で試してみればいいのよ」（祥林嫂）

（pp.49-50）

「その顔、さっきの男にやられたんだな」(恵)

「違う。躓いて顔からころんじゃって……(中略)」(松子)

「いいんだよ、松ちゃんは刑務所にいたころから、嘘をつくのが下手なんだから」(恵)

「嘘じゃ……」(松子) (pp.229-230、下)

柳媽は朱子学いってんばりのもと国子監生で厳格な旧教主義者である四叔の家の下女でありながら、仏教を信じ、殺生を拒否し皿洗いしかしないなど、頑固なまでの逞しさが感じられる。恵も男に過度に依存することなく、女手一つで二人の子供を育て上げるなど現代の独立した強い女性像を感じさせる。彼女たちは祥林嫂、松子のそれぞれと下働き、前科者という社会的境遇を同じくしながらも強い自立心をもつ人物なのである。

2-1-5 晩年期——希望の日々と絶望、希望の在り処を問うた直後の悲劇的な死

その後、祥林嫂は唯一の希望である寄進に向けて1年あまりを勤勉に過ごし金を貯める。やっとのことで全財産を投げ打って廟へ敷居を寄進し、晴れ晴れと目を輝かせ嬉しそうに祝福の手伝いをしようとするものの、強く拒絶される。そして絶望し孤独と恐怖で何も手につかなくなる。松子は洋一が逮捕されたにも関わらず出所後の結婚を夢見て刑務所の近くに住み毎日堀越しに思いをはせるなど出所後の生活にすべての照準を合わせ準備に勤しむ日々を過ごす。待ちに待った出所の日、晴れ晴れと目を輝かせ嬉しそうに迎えに行くも強く拒絶される。祥林嫂も松子も唯一の希望を信じた日々は同様にまたもやあっけなく潰えるのであった。そして絶望し何も手につかなくなってしまうのである。

祥林嫂は四叔の家を追い出され、松子もアパートを追い出された(仕事ができなくなったこと、浮浪者と間違われ、逮捕歴が露呈したことなど)。祥林嫂は浮浪者になり、松子もゴミアパートと公園(川原)を行き来し、傍目には浮浪者同然となってしまう。そして、祥林嫂は語り手である「私」と出会い質問をするもはぐらかされ絶望のうちに祝福の日に野垂れ死にす

る。松子は語り手である「笙」と同年代の学生たちに公園（川原）で探し物について質問したところ暴行されて死亡する。

「人が死んでも、魂はのこるのかのかい」

「それじゃ、地獄もあるのかね」

「それじゃ、死んでしまった家族には、みんな会えるのかい」

(pp.25-26)

「ねえ、あんたたち、このあたりに名刺が落ちてなかった？ くしゃくしゃに丸めてあったんだけど…」
(p.356、下)

両者の質問は一見まったく異なっているように思われる。しかし、これらの質問が最後の最後の希望であったことは、物語構成上、重要な共通点である。

祥林嫂は祝福の準備で魯鎮が賑わう中、学識のある「私」であれば信じられるとの思いから、彼の答えに救い・祝福を求めたのであろう。「私」が特に3つ目の質問に「会える」と答えていたら純粋な祥林嫂はその言葉を信じ安らかな死を迎えることができたかも知れない。再起できたかもしれない。丸尾常喜によれば、魯迅は祝福を執筆する前年の講演で「死ぬ者がよるこんで死んでいき、生きのこる者は安心して生きていく。うそと夢はこのようなき偉大です。ですから、道がないならば、私たちに必要なのは夢です。」^(注11)と述べているという。すなわち、魂が存在しても、地獄と家族の狭間で道を失っている祥林嫂にとって、必要なのは「私」の優しいうそであり、夢であった。しかし「私」はあろうことか「怪力乱神を語らず」という論語原理主義的で旧教的な回答を無意識のうちに用い、結果的に祥林嫂の希望を挫くのである。そうして、彼女は以前であれば活躍していたはずの祝福の日に皮肉にも死を遂げてしまう。ここには進歩的新知識人であっても無意識に旧教にしばられているばかりか、民衆に祝福を与えることのできる存在とは限らないという痛烈な皮肉と、その1人である魯迅自身の内省を示していると考えられる。祝福を書く直前^(注12)に魯迅

は弟の周作人一家と仲違いをして別れている。この原因に魯迅が無意識に家父長として振る舞っていたことも指摘されており^(注13)、彼は自らも無意識に旧教教的なものに縛られていたことを自省したのかもしれない。そして『彷徨』では、前作の『呐喊』に比べて、旧儒教社会への批判に加えて自由・平等など近代性への懐疑も示している^(注14)。近代的知識人たる「私」が、祥林嫂の真剣で「私」にとっても哲学的な重みをもつ質問を受けた直後に、のんきにフカヒレを食べることを考えていることに現れる。ただし、「私」にはその彷徨する未熟さゆえ、成長や未来へ可能性、希望が託されていることは予め指摘しておかなければならない。(詳細は2-2)

松子は浮浪者同然になったあと幻覚など精神に異常をきたし病院へ1度だけ行く。そのとき別の人の見舞いに来ていた恵と再会する。彼女は専属の美容師を探していると言い連絡先を書いた名刺を松子の手に握らせる。浮浪者同然の自分と経営者になった恵との差に苛立ち、松子は名刺を公園(川原)で捨ててしまう。しかし、その夜、無意識にハサミを動かす動作をしている自分に気が付く。(映画では、妹・久美の髪を切ってやっている自分と嬉しそうな妹の姿という夢で目が覚める描写が追加される。自分の嫉妬心にも関わらず無償の愛を与えてくれていたのは久美であり恵であったことに、このときはじめて気付くのである。)そしてまだやれると再起を誓い、捨ててしまった名刺を探しに公園(川原)に行き必死に探すのだった。このことから名刺は最後の最後の希望であったと言える。大学生集団に名刺の在処すなわち希望の在処を質問したのである。しかし、彼らはそんな質問など聞く耳ももたず暴行に及び、殺意もなく結果的に松子を殺してしまう。暇つぶし感覚でホームレスを襲うといった事件と同等の感覚である。家父長制に由来する男性依存の被呪縛者たる松子・元教師が、教育現場から道徳が排除され現代的な過度の自由のもとに育った被解放者たる若者に虫けらのように殺されるのである。人の死ですら暇つぶしとする感覚は、「藤野先生」の幻燈事件のエピソードや「阿Q正伝」のラストシーンで魯迅が描く当時の中国大衆の感覚と一致する。現代日本においては、道徳的良心(儒教的に言えば仁)すら過度の自由により消滅させられつつあることを暗示する。これは著者山田宗樹が若者の姿を通して、

「祝福」執筆当時の魯迅が近代への疑問を投げかけているのと同じように、現代への疑問を投げかけているのである。一方で、筈のように、傍目には不幸に見える人の人生に思いをはせることのできる若者もいる。「祝福」の「私」の中にある両面性、すなわち〈近代的知識人の無自覚な残酷性〉と〈未熟な若者だからこそその希望〉を、『嫌われ松子の一生』では〈現代の大学生集団〉と〈筈〉がそれぞれを象徴するのである。「希望とは本来あるとも言えないし、ないともいえない」という「故郷」での魯迅の言葉を山田が繰り返しているといえよう。

2-2 未熟な若者が語り手として女の人生を追想していくという構造——私と筈

両作は女性主人公の人生が類似しているだけでなく、女性主人公の死が先にありその謎が次第に明かされていくというミステリー的な構成や、語り手である「私」と「筈」の位置付けも類似している。彼らは女性主人公の生前を知る人物の話から、女性主人公の人生を紡いでいき、思いを馳せるのである。また、語り手が、精神的に彷徨しており未熟さを感じさせる若者であり、それゆえ希望となりうること、若かりし頃の作者自身を投影していると推察できることも共通する。「私」は故郷の魯鎮に帰省している進歩的知識人であり、若かりし魯迅を投影していると考えられる。『嫌われ松子の一生』著者の山田宗樹は筑波大学で農学修士号を取った経歴を有し、作中には筈も大学生であり生物化学系の学生であることを示唆する表現がある。

2-2-1 彷徨するが故、希望となりうる「私」

祝福の語り手である私の人物像は多くの先行研究で語られてきた。以下は、「私」について、もっとも簡潔かつ明瞭にまとめられているので、そのまま引用する。

語り手の「僕」は「本が読める、外にも出ている」（祥林嫂の言葉）
改革派で、大都市の教育界に身を置くような人であるが、苦悩する祥

林嫂の問いかけに対し「よく知らない」と答えて彼女を見捨て、翌日魯鎮を発って県城に行き、昔友人たちと楽しんだ名物料理を一人で食べようなどとお気楽な考えに耽っている。そんな無気力な新興中産階級の「僕」に最下層の女性の悲惨な人生を語らせることにより、本作は、1920年代中国の村や町を覆っていた閉塞感を巧みに描き出しており、円熟した傑作といえよう。それにしても「僕」とは何者で、何を求めて故郷の魯鎮まで帰ってきたのだろうか。

(藤井省三『魯迅—東アジアを生きる文学』p.89)

このような、無気力な新興中産階級という解釈は、凡その先行研究^(注15)で一致しているものである。一方で、評価が分かれるのは、祥林嫂に思いを馳せる存在としての「私」を重視する立場と、祥林嫂を忘れ去ろうとする逃避的存在として「私」を重視する立場である。ただし、「私」の矛盾する2つの存在は相互に否定するものではなく、どちらをより重視するかという程度の差である。ここで注目したいのは、作中における逆接の多用である。「私」は祥林嫂のことを考えては止め、それでも考えずにはいられずということを作中で何度も繰り返し、彷徨している。

僕の答はまちがいなくある程度の責任を負わなくてはならない……。

(中略)

僕とはまったく無関係なのだ。(中略)

しかし僕はやはり不安で、一夜明けてもなおもしきりに思い出していた(中略)

鱻ひれだけは食べなくては、(中略)

「亡くなったのか」僕の心臓は突然縮み上がり、(中略)

しかし僕の驚きは一時のことにすぎず、(中略)

それでもたまには、少し気がとがめるようでもあった。(中略)

祥林嫂のことを訊ねてみたいと思ったが、(中略)

最後は止めにした。(中略)

この天涯孤独の祥林嫂は、(中略)

こう考えるうちに、かえって次第に心地よくなってきた。(中略)
それでも(中略)彼女の半生の足跡の断片が、このとき一つに繋がったのだ。(pp.27-32)

最終的に気だるい祝福の空気の中、祥林嫂を忘れてしまったとも捉えられる描写がなされるのだが、作中の彷徨ぶりを考えれば、再び思い出さないと限らないのではないか。むしろ、ことあるごとに思い出していくのではないか。その意味で作者は新興知識層の良心に対する希望を、完全否定してはいないのでないかとも思われる。未熟だからこそ希望にもなりうるからである。

尾上兼英『魯迅私論』では魯迅小説の中の知識人を三種類に分ける。第一に古い時代の知識人で、人生の敗者であり、魯迅の同情を受ける者たち、第二に青年時代に進歩的思想の洗礼をうけて古いものの破壊に熱中し、革命が挫折すると忽ち失望し熱を失い、戦列から離れた人で、魯迅の風刺批判を受ける者たち、第三に、良心を麻痺させられず苦しみ動揺する一群で、困難な時代に誠実に生きようともがいている者たちであるとする。^(注16)祥林嫂を忘れ去ろうとする逃避的存在として「私」を重視する立場では、「私」が最終的に上の分類でいう第二群に向かうものと解釈できる。一方で、祥林嫂に思いを馳せる存在としての「私」を重視する立場では、「私」が最終的に第三群に向かうものと解釈できる。尾上は、祝福の「私」がどれに分類されるかは指摘していないが、少なくとも「祝福」の文面からは「私」には挫折経験や失望感も感じられなければ、困難な時代に対する高い意識も感じられない。第二群と第三群の間というよりも、彷徨し、どちらの群にも、むしろどこにも、未だ行き着いておらず、若さと未熟さを感じさせる存在である。なお、先の引用文で、訳者の藤井氏が原文“我”の日本語訳に「私」ではなく「僕」を用いていることから語り手の若さ未熟さを明示する意図が感じられよう。また、「私」の帰郷の目的が、祝福の行事であるとは到底読めないし、はっきり示されないことには、ふらりと帰郷し、すぐに故郷を発つという、気まぐれで場当たりの精神的未熟さを強調する魯迅の狙いがあるとも言えるだろう。肉体的には成熟し、

知識もあるが、社会に対する高い意識は感じられず、精神的に成熟した大人とはとても言えない。(ここが現代日本の普通の大学生像である『嫌われ松子の一生』の語り手・笙と共通する。)だが「私」は、祥林嫂の質問に窮し「逃げ帰った」ことを自覚しており、叔父にもう一人のできそこないと見られている疑念^(注17)など低い自己評価を下すこともできている。また、すぐに他のことを考えたりするものの、自分の行動に自責の念を感じたり、祥林嫂の一生を自ら紡いで行く姿勢は、魯鎮の他の人々とはやはり違う。(ここも『嫌われ松子の一生』の語り手・笙と共通する。)子供から大人、旧人から新人という進化^(注18)の過渡期にあるとも捉えられよう。彼の対応が祥林嫂の希望を挫いてしまう結果になったことは確かだが、彼が真つ当に成長していく可能性は否定できない。魯迅の第一集『呐喊』期に見られる子供など未熟な者に対する希望の眼差しが、「私」にも向けられてよいのではないかと考えるのである。であるから、最後に希望を見いだせる可能性があるのである。「希望は本来あるとも言えないし、ないとも言えない」のである。「祝福」が第二集『彷徨』の第一作であることにも、ここに意味があるのではないだろうか。

魯迅の実弟・周作人によれば^(注19)、「祝福」の「私」のような帰郷を魯迅はしていないが、四叔の家の特徴などが魯迅らの実家の特徴に通じていることを指摘している。また、前出の代田氏の論文^(注20)は、魯迅の心理状況が「私」に投影されていることを指摘している。これは、魯迅の帰郷物の多くで共通するところである。「祝福」に至るまでの執筆空白の1年の間の周作人一家との離別、文学革命の仲間たちとの離別^(注21)、彷徨えるユダヤ人伝説^(注22)など『彷徨』作品への影響が様々に指摘されている。これらは自らを罪人と自覚するという点で共通している。自身に残る無意識の封建的態度への戸惑い、無力感と挫折、そして希望、さまざまな感情に揺らぎ彷徨する中で、若かりし自分を思い出したのかもしれない。

2-2-2 彷徨するがゆえ希望となりうる「笙」

笙についても、「私」と同様に作中で直接的な人物紹介はなされないものの、凡そ以下のような人物像が浮かび上がる。

福岡から上京している理科系の大学2年生である。難関の大学で、バイトと奨学金で生活をやりくりする一方で、未成年でありながらもタバコ、ビール、セックスと、現代風の大学生として描かれている。授業は出ているようだが、講義は聞き流し、試験は人のノートをコピーして乗り切る腹積もりであり、勉強はするが無気力。新聞記事やニュースには疎いようで、社会に目を向けることもあまりなく、世間知らずで失言をしてしまうこともある。気ままに日々を過ごしているようである。「学びて思わざれば罔し」であり彷徨している、こうしたところが「祝福」の「私」によく似ている。田舎にはほとんど連絡しないのに、荒川から筑後川を思い出したりする一貫性の無さ、彷徨感覚は、故郷に戻ってきたと思ったら、フカヒレだけ食べてすぐに帰ろうと決める「私」とよく似たものがある。また、落とし物の聖書をわざわざ教会に届けたりするなど、親切心や思いやりの心も持ち、松子の人生に主体的に向き合っていく。その過程で、松子の生き様に対する偏見、とまどい、同情、それからの逃避と、様々な感情を見せる。彷徨しながらも成長の可能性、希望も思わせるような人物像は大いに「私」と重なる。以上をよく表している部分を以下に引用した。

他人同然だと思っていた松子伯母だが、荒川を見ていたことを聞かされてからは、そうはいかなくなった。俺だってあの光景を見たら、故郷の筑後川を思い出して、たまらない気持ちになる。

一体どんな人生を送ったのだろう。

(中略) 松子伯母のことを知りたいという気持ちが、膨らんできていた。

(pp.198-199、上)

「俺、生前の松子伯母さんのこと何も知らないんです。もし生前の松子伯母さんの消息を知っている人がいれば、会って話を聞きたいと思って……」

「聞いてどうするの？」

「……少しは松子伯母さんのことを、分かってあげられるかもしれな

い、かなって」
(p.311、上)

「沢村さんから電話があったんだよ。川尻笙って子が行くと思うから、松子の話をしてやってくれてね。それで、世間知らずで失礼なことを言うかもしれないけど、ゆるしてやってくれてね」(p.131、下)

「でも、人殺しは人殺しでしょ。それに、なんだかもう、松子伯母さんのことは……」(p.110、下)

また、語り手の笙は、作中に「生化学Ⅰ」「海洋生物学Ⅱ」などの科目が登場するため、理系の学生であることが示唆されており、山田宗樹（筑波大学にて農学修士号取得）の若かりし頃を反映している可能性がある。

3 作者どうしの比較——魯迅と山田宗樹をつなぐもの

これまで、「祝福」と『嫌われ松子の一生』の内容を比較し、類似点を指摘してきた。ただし、現在のところ、山田が魯迅について各種媒体で述べたことはない。しかし、両者は経歴や、思想、作風にも類似点が見られ、山田宗樹が魯迅の影響を受けている可能性は大いにありうる。

3-1 理科系分野から文学への転向

魯迅と山田はともに、高等教育において、それぞれ医学、農学という理科系の分野（すなわち科学・サイエンス）を学んでおり、そこから文学への道に転じている。このことは、両作の類似にも少なからぬ影響があると思われる。

藤井省三氏は、魯迅「祝福」へのチェーホフ『せつない（トスカ、ふさぎの虫）』の影響を、「傷逝」への森鷗外『舞姫』の影響を指摘している。ここで注目したいのは、チェーホフも森鷗外も医学を学んでおり、その経歴が魯迅と共通することである。『トスカ』の主人公イオーナは貧しい車夫（馬車の運転手）であり、息子に先立たれた不幸話をことあるごとにし

ようとするのだが、いつも話の出鼻を挫かれてしまう。祥林嫂と同様である。不器用な孤独者に対する周囲の無関心という残酷性は、医学ではどうしようもないことである。医師として孤独な患者に触れてきたチェーホフはそれを痛感していたのであろう。魯迅が仙台医学校を辞め、文学に転じたのも「藤野先生」に描かれる幻燈事件をきっかけに、中国民衆の治すべきは肉体ではなく精神であると悟ったからである。医学の限界を痛感したからであるとも言える。彼らは医学などサイエンスの限界にいち早く気づいていたのである。科学万能主義の時代こそが近代であるのだから、彼らが近代の矛盾に敏感になるのは必然であると言える。(鷗外に至っては、『高瀬舟』で今日の現代社会における我々の尊厳死や安楽死を巡る葛藤を予言していたかのようである。)

山田についても同様のことが言える。農学修士取得後、製薬会社で研究者をしていたためであろうか、彼の作品には生と死、伝染病、精神療法、臓器移植、人工中絶、不老不死など医学的な話題を扱ったものが多い。また直接医学に関係のない『嫌われ松子の一生』でも、笙の恋人で同級生でもある明日香は医学部再受験の道を選び、笙と決別することが描かれる。山田も魯迅と同様、人生のどこかで医学を志した経験があるのかもしれない。山田作品の多くに彼の医学への関心の高さとともに、その発展が生み出した現代的な矛盾や未来の姿にまで目を向ける冷静かつ想像的な視線が伺われる。そして医学など科学ではどうしようもないもの、すなわち人間の心、社会、ひいてはその未来の姿にまで示唆に富んだ作品を生み出し、読者に考えさせる。彼は民主主義や自由といった現代日本の価値観さえ絶対視していないのである。

医学や農学といった科学の経験が、科学そのものを客観視し、その発展とともに成立した近現代社会の諸相にまで鋭くメスを切り込む彼らの思想に大きな影響をあたえたといえよう。彼らはまた、その発露のための最良の手段として科学と対極にある文学を選んでもいるのである。魯迅が医学から文学に転じたことは一般的によく知られており、山田がシンパシーを感じ魯迅作品を読んでも不思議ではない。(なお、仙台医学校時代の魯迅を描いた太宰治の『惜別』も山田は読んでいるものと思われる。詳細

は3-3)

ちなみに魯迅のもう1人の弟の周建人は魯迅の影響を受けて、生物学を学んでいる。また、松子の出身大学である九州大学では、郭沫若が医学を修めていることを付け加えておく。

3-2 当代における先進的女性観

魯迅と山田はともに彼らの時代としては、先進的な女性観を持っていることも共通している。

魯迅は旧儒教思想が支配する社会において、虐げられる女性の現実に深い同情を持っており、女性の解放を志向した。「私の節烈観」(1918)は「女性に対しては「節」を守り、まさかのときにはみずから命を絶って「烈女」になれと求めながら、男のほうはうまく生きのこって、あとで「烈女」たちを称讃する」^(注22)などの女性を圧迫する封建道徳を批判している。「祝福」脱稿前年の講演では、現状を踏まえた冷静な女性解放を唱えた。

北京女子高等師範学校での講演「ノラは家を出てどうなったか」(23年12月)は、イプセン『人形の家』の主人公ノラを中国における自由恋愛、女性解放のシンボルとして崇拝する女子学生たちに向かい、出奔後のノラがたどるであろう厳しい運命を予測して、一時的な激情に駆られ過激な行動に出ることなく粘り強い闘いにより女性の経済的権利獲得を目指すべきであると説いている。

(藤井省三『魯迅 東アジアを生きる文学』pp.87-88)

現代の感覚で言えば当然のようであるが、魯迅の生きた時代においては近代的で革新的な女性観である。そのために彼は「封建的旧社会の産物そのものであった」^(注23)妻・朱安に対して同情しながらも、「いわゆる目覚めた女性」^(注24)許広平に惹かれていったのではあるまいか。

封建的旧社会の産物そのものであった妻朱安と人間的会話を交わし

えなかった魯迅にとって、才気と情感にあふれた女子学生許広平の積極的な接近は、年齢の開きや既婚の問題があったにせよ、これまでに味わったことのない甘美な刺激であった。(片山智行『魯迅 阿Qの革命』p.181)

「祝福」では、祥林嫂に対して彼女を批判の対象にするのではなく、彼女を追い詰めた前近代的で、旧教的な当時の中国の封建社会を批判し、読者に社会への省察を促している。祥林嫂や同様の境遇の女性たちには深い同情を持っていたのは先に述べた通りである。主人公に孤独な死を与えることによって、読者による主人公への批判を回避し、死の背景である旧体社会へ目を向けさせているといえる。これは「孔乙己」など魯迅作品でよく見られる傾向である。(逆に「傷逝」では後先考えずに自由恋愛に突き進み墮落していく女性主人公の最期を量しており、彼女への読者からの批判を回避していない。むしろ彼女への同情を回避させ、自業自得の印象を読者に抱かせるものである。これは、先の引用で示した講演のメッセージそのものである。)

一方、山田は、女性の多様な生き方に共感を寄せる。彼の短編集『ランチブッフエ』に関するインタビュー記事^(注25)で、作中の平凡な主婦の人生について、「波乱万丈な松子の一生も今回の平凡な人生も、書いている僕からすれば根っこは同じ。何も成し遂げられなくても、失敗続きで現実には傷つこうとも、ただ生きて、死んでいく……それだけで十分じゃないかと、たぶん僕が思いたいんです」と述べている。

女性の自由・独立が絶対善と見なされ、過度にそれが叫ばれる現代において、そうした生き方を否定はしないが、絶対視することもしない。社会からの過度な独立要請に適応できず逆に苦しめられる女性がいること、伝統的な女性の生き方に幸福を見出すこともできることを示唆する。松子のようであれ、恵のようであれ、主体的自己決定の結果であれば、男性から完全に独立しようが男性に依存しようが自由であるべきであるとする。ともすると反動的であると言いがかりをつけられそうであるが、女性の生き

方の主体性と多様性を重視する先進的な女性観といえよう。当然、主体的自己決定の結果を「自己責任」として片づけることを主張するものではない。祥林嫂の生きた清末に比べれば、松子の生きた昭和平成の日本は制度的にも思想的にも圧倒的に自由であることは疑いえない。しかし、だからこそ「自己責任」という現代に支配的な考え方が松子を不幸だと決め付け、正当化する危険性がある。確かに、松子の転落に彼女の不器用さによる「自己責任」の部分はあっただろう、しかしそれが転落の社会的要因や、転落の中にも幸せがあったことなどを覆いつくしてしまうことこそ山田にとっての不幸である。読者に松子を「不幸」、「自業自得」と切り捨てられることは作者としての本意ではない。というのも、山田は松子が死に際に妹・久美に天国で「おかえり」「ただいま」と迎えられる描写をし、松子を祝福するのである。また雑誌^(注26)のインタビューでも松子は不幸だとは思わない旨を述べている。(山田は祥林嫂も不幸な女だと決め付けたりはしないだろう。) 魯迅と同様、山田も、孤独な死を描くことで読者に女性主人公への批判ではなく社会へ目を向けるよう望んでいるのであり、松子に対しては魯迅の祥林嫂に対するものと同様、深い思いがあるのである。

女性への真摯な眼差しは、作中でも、随所に見られる。例えば以下の部分は、男勝りな女である恵に女を擁護するセリフを言わせることで、男としての山田の意見表明と、女が女を理解する必要性の主張を、同時に行っていると考えられる。

「ずいぶんとひどい男だったらしいよ。あたしに言わせれば、殺されて当然だと思うんだけど、裁判官は男だからね、八年も喰らってた。ふつうは長くて四、五年だよ。八年は長すぎる。なんで弁護士が控訴させなかったのか不思議なくらいだよ」(p.108、下)

「松子は人を殺してしまった。だが、女が男を殺すからには、それな

りの事情があるんだよ。……」(p.110、下)

また、妊娠中絶をテーマとした作品である『天使の代理人』についてのインタビュー記事^(注26)では「妊娠出産が女性だけのものだという考えはありません。娘は助産院で生まれたのですが、最初の妊娠健診から出産の瞬間まで立ち会いました。自分自身も当事者であるという認識でした。」と述べており、「言うは易し行は難し」を実践している。また、ホテルのランチbuffetでの女性たちのお喋りに興味を抱くなど、男性として一般的には興味を抱かないであろうことにも注目しており柔軟な女性観を持った人物と言えよう。

3-3 魯迅と山田をつなぐ日本人作家たち、その背景にある福岡

太宰治の『惜別』は魯迅の仙台医学校留学時代を描いたものであり、太宰治は魯迅の影響を受けていると考えられている。また、山田宗樹も太宰文学を好んでいる可能性が高い。なぜなら『嫌われ松子の一生』において自称太宰治の生まれ変わりの男(八女川徹也)が登場する。松子のアパートに転がり込むが、才能はあるものの行き詰まり電車で飛び込み自殺してしまう。松子はその後、二度別の男に裏切られ、失意の末、玉川上水で自殺しようとする。太宰と同じ死に方を選ぶのである。そこから救ってくれた男寡は〈島津〉であるが、これは太宰の本名〈津島〉からとったアナグラムと思われる。また、八女川がいつも太宰作品を読んでいること、元国語教師の松子ともいつも太宰の話題を通して惹かれあったことなどから、作者である山田も太宰作品に精通していることが予想される。その中には『惜別』もあるはずで、そこから「藤野先生」など、モデルとなった魯迅作品に進みうるし、『呐喊』『彷徨』と読み進んでいく可能性はあるだろう。また松子は元中学国語教師(文学部卒)であるから故郷については知っているはずで、松子が教師をしている昭和45年、1970年には、1972年の日中国交回復を前に、ほとんどの教科書に魯迅の「故郷」が入っている^(注27)。山田自身(1965年生まれ)、中学の教科書で「故郷」に触れた可能性は高い。同じ魯迅の帰郷物として、「祝福」に触れた可能性もあろう。

また、太宰と同年生まれの文豪・松本清張の『父系の指』に魯迅「故郷」の影響が指摘されている^(注28)。山田は横溝正史賞のミステリー小説出身であり、また社会派であるため、社会派ミステリー小説の始祖と言われる清張を介して、魯迅に行き着く可能性もある。『父系の指』は松本清張の初めての本格推理小説の直前の私小説風の作品であると指摘されており^(注28)、太宰の『惜別』のように、清張作品の中では異彩を放っている。初期短編から最晩年までのあらゆる清張作品を愛読し多大な影響を受けたと自称する宮部みゆきも『父系の指』を自身の松本清張傑作選^(注29)の10作のうちの1つに収録している。また、この選集の中に、写真の少女の不幸な人生を辿るという内容の『絵はがきの少女』という『嫌われ松子の一生』と設定のやや似た小説がある。また犯人捜しよりも、犯罪に行き着かなければならなかった社会環境や人生に焦点を当てる清張の作風は、『嫌われ松子の一生』と共通する。さらに、宮部は山田が横溝正史賞を受賞したときの審査員の1人であり、山田は女性主人公を描くきっかけについて、以下のように述べたことがある。

6年前に横溝正史賞を受賞した時、選考委員の宮部みゆきさんから「女性の描写をもっと工夫してください」というコメントをいただいたことが影響しているのかもしれませんが。見返したいという気持ちがどこかにあったのだと思います。(『日経ビジネス』2004年8月号p.98)

このことから、山田が、宮部が尊敬する松本清張の女性描写を参考にしてもおかしくはない。

また、松本清張の出身地は福岡小倉とされ、彼は同地が舞台の『或る「小倉日記」伝』で芥川賞を受賞した。『嫌われ松子の一生』の舞台も福岡である。さらに清張が転校した天神島尋常小学校の2つ先輩に岩下俊作がいる。彼も福岡小倉出身であり『富島松五郎伝』(『無法松の一生』として映画化)の著者である。映画『無法松の一生』はこれまで3度リメイクされ、主人公の無法松は三船敏郎、三國連太郎、勝新太郎ら大スターによっ

て演じられ、作品の知名度は高いと思われる。福岡小倉を舞台に、貧しい車夫の孤独な最期という悲哀や時代への示唆性は、チェーホフの『せつない』や魯迅「祝福」に通ずるものがあり、その原題には魯迅「阿Q正伝」からの影響が、映画版タイトルには山田『嫌われ松子の一生』への影響が感じられよう。なお、映画版『嫌われ松子の一生』のメガホンを取った中島哲也も福岡出身である。山田自身は愛知の出身であるが、研究者を辞して以降、福岡にある妻の実家を長らく生活の拠点としている^(注30)。地元老舗百貨店である岩田屋（作中では磐井屋）のことなど、昭和福岡の細かい描写などからも福岡への相当な関心と調査のもと本作を書き上げたことは疑いえない。福岡の作家たちに対しても同じであろう。「松子」という珍しい名前にも、なんらかの思いが込められているはずである。無法松や松本清張から〈松〉の字を採ったのではなかろうか。

また、主要な登場人物に、八女川徹也や龍洋一など福岡らしい姓を用いているなどのこだわりが感じられる。八女川は八女市から採ったものであろう。さらに注目したいのが、龍洋一の〈龍〉という姓である。彼は松子を翻弄し続け、その死を知らず贖罪意識から彼女を捜し彷徨い続けていたところに笙と出会い、生前の松子の話をする重要人物であるが、彼の〈龍〉という姓は実在し、ほぼ福岡にしかいない中国系の姓ということである^(注31)。作中で、松子が「わたしが生まれ育ったのは、(中略)川尻姓はよそ者なのだ、子供なりに傷ついた記憶がある。」(p.86)などと、川尻姓の歴史と地域史を語る場面があり、山田自身の関心の高さが伺える。このことから、山田が〈龍〉という姓を用いたのはそれなりの意図があると考えられよう。

姓の歴史は、差別問題などに結びつく難しい問題であるので、ここではその意図にまで詳細に言及することは差し控える。ただ、松子の勤務した中学は人権教育が浸透した地域にあることを暗示する描写があり、また福岡は、水平社運動で活躍し、日中友好協会の初代会長を務めた松本治一郎の故郷でもある。綿密な取材のもと、人間社会の悲しい現実を背景に描こうとする山田の姿勢は、かつてハンセン病差別や障害者差別などを描いた松本清張に、やはり通じるものがある。

そして最後に言いたいのは、作者の〈龍〉という姓へのこだわりが、中国への関心、ひいては魯迅への関心に由来することの可能性である。そしてその背景は、やはり福岡だろう。福岡が古来より中国文化の玄関口であったことは言うまでもない。文学に関しても歴史的に大きく影響を受けてきたことだろう。長らく醸成され福岡に根付いた中国文化への関心や受容性が、松本清張ら福岡の作家たちに魯迅の影響が感じられる理由の1つなのかもしれない。このように考えると、太宰というペンネームが大宰府に由来するのかどうかは別として、福岡の歴史や文化に強い思い入れがある山田ならば、中国文学の父である魯迅に強い志向性・感受性を有するとしても不思議ではあるまい。

以上のような繋がりを見れば、山田が魯迅の影響を直接ないし間接的に受けている可能性は高そうである。

4 おわりに

作者どうしをつなぐものとしては、他にも贖罪意識やロシア文学のほか、『女の一生』のモーパッサンなどがあり、それらへの言及と山田の他作品への言及は、紙幅の都合により割愛した。しかし、魯迅「祝福」と山田宗樹『嫌われ松子の一生』には類似した個性の登場人物によるパラレルな物語展開と語りの構造をもつことを凡そ示せたつもりである。ただ、山田が魯迅の影響を自認しているかは本人の言を待つほかない。しかし、そうでなくとも、魯迅の偉大さは、平成の日本文学にさえ、その影響を読者に感じさせてくれることにあると結論づけられよう。今後の魯迅研究の発展のためにも、山田以外にも日々生まれる新しい日本文学に見い出されうる魯迅の影響への更なるアプローチが望まれる。

【注】

(注1) 藤井省三『魯迅事典』三省堂、2002、p.299

魯迅著・藤井省三訳『酒樓にて／非攻』光文社、2010、p.314

- (注2) 大連速購科技有限公司「日本人にとっての魯迅」
2010年12月4日付記事、2012年10月閲覧
<http://sugoo.seesaa.net/article/173283003.html>
- (注3) 藤井省三『魯迅—東アジアを生きる文学』2011、p.21
- (注4) 魯迅著・藤井省三訳『酒樓にて／非攻』pp.250-252
- (注5) 『産経新聞』「魯迅が消える?! 中国の教科書 プライド傷つけると賛成論も」
2010年12月30日付記事、2012年10月閲覧
<http://sankei.msn.com/world/china/101230/chn10123017280001-n1.htm>
- (注6) 藤井訳では「僕」としているが、『嫌われ松子の一生』著者である山田宗樹(1965年生まれ)が読んだとすれば竹内好訳のものである可能性が高いため以下の記述では、断りの無い限り「私」に統一する。
- (注7) 金澤俊夫・タ起夫(2006)「作品特集『嫌われ松子の一生』」『キネマ旬報』(1457) p.129 原作者インタビュー
- (注8) 中島哲也脚本『嫌われ松子の一生オフィシャルブック』キネマ旬報社、2006、pp.144-145。原作本 pp.200-201、215 に該当するが核心部分に猥褻表現を含むため、ここでは、映画版脚本を引用した。pp.202-214 は笙のパートである。
- (注9) 片山智行『魯迅のリアリズム「孔子」と「阿Q」の死闘』三一書房、1985、p.134
藤井省三『魯迅事典』p.79
- (注10) 周作人著・水野正大訳『魯迅小説の中の人物』新風舎、2002、p.155
- (注11) 講演「ノラは家を出てどうなったのか」
丸尾常喜『魯迅 人と鬼の葛藤』岩波書店、1993、pp.213-214
- (注12) 1923年7月のこと。片山智之『魯迅阿Q 中国の革命』中央公論社、1996、p.173
- (注13) 代田智明『魯迅を読み解く』東京大学出版会、2006、p.107
- (注14) 藤井省三『酒樓にて／非攻』p.249
- (注15) 中井政喜「魯迅「祝福」についてノート(2)」『野草』第79号、
2007年2月、pp.34-54
- (注16) 尾上兼英『魯迅私論』汲古書院、1988、p.34
- (注17) 藤井省三『酒樓にて／非攻』p.31
- (注18) 当時の魯迅は進化論の影響を受けていたとの指摘がある。
伊藤虎丸『魯迅と日本人』朝日新聞社、pp.115-122
- (注19) 周作人『魯迅小説の中の人物』p.164
- (注20) 代田智明『魯迅を読み解く』p.104
- (注21) 藤井省三訳『故郷／阿Q正伝』p.296
- (注22) 片山智行『魯迅阿Q 中国の革命』p.169

- (注 23) 片山智行『魯迅阿 Q 中国の革命』 p.181
- (注 24) 片山智行『魯迅阿 Q 中国の革命』 p.178
- (注 25) 橋本紀子「ポストブックレビュー著者に聞け『ランチブッフエ』」『週刊ポスト』
2006年7月21日 p.127 (インタビュー記事)
- (注 26) 福田純子「著者が語る注目の本『天使の代理人』」
『日経ビジネス』2004年8月 p.98 (インタビュー記事)
- (注 27) 藤井省三『魯迅事典』 p.291
1956年教育出版、1966年光村図書、1969年三省堂、筑摩書房、
1972年学校図書、東京書籍、それぞれ魯迅『故郷』を掲載。
日本の中学教科書はこれらの会社の寡占状態であるため、
1972年入学以降の日本人はほぼすべて『故郷』を読んでいることになる。
- (注 28) 藤井省三「松本清張の私小説と魯迅の『故郷』」『文学界』2012年6月、pp.238-
251
- (注 29) 宮部みゆき選『戦い続けた男の素顔 宮部みゆきオリジナルセレクション
(松本清張傑作選)』新潮社、2009
「父系の指」 pp.137-174 「絵はがきの少女」 pp.233-250
- (注 30) 橋本紀子「ポストブックレビュー著者に聞け『ランチブッフエ』」『週刊ポスト』
2006年7月21日 p.126
- (注 31) 名字由来 net
<http://myoji-yurai.net/searchResult.htm?myojiKanji=%E9%BE%8D>
〈龍〉姓は1位福岡県 2800人、2位佐賀県 200人
同姓同名探しと名前ランキング
<http://namaeranking.com/?search=%E5%90%8C%E5%A7%93%E5%90%8C%E5%90%8D&surname=%E9%BE%8D&tdfk=%E7%A6%8F%E5%B2%A1%E7%9C%8C>
県内では大川市に最も多く、松子は大川第二中学（実在せず）の教師であった。

【参考文献】

- 伊藤虎丸（1983）『魯迅と日本人』朝日新聞社 277pp.
- 尾上兼英（1888）『魯迅私論』汲古書院 275pp.
- 片山智行（1996）『魯迅 阿 Q 中国の革命』中央公論社 259pp.
- 片山智行（1985）『魯迅のリアリズム』 415pp.
- 金澤俊夫・夕起夫（2006）「作品特集『嫌われ松子の一生』」『キネマ旬報』（1457）、
127-144

- 代田智明 (2006) 『魯迅を読み解く』 東京大学出版会 pp.102-134
- 周作人 (1996) 『周作人随筆』 松枝茂夫訳 富山房 pp.256-290
- 周作人 (2002) 『魯迅小説の中の人物』 水野正大訳 新風舎 pp.152-156
- タカザワケンジ (2012) 「作品大解剖『百年法』」 『本の旅人』 18, (8), 12-19
- 中井政喜 (2007) 「魯迅「祝福」に関するノート (1)」 『南腔北調論集』 東方書店 pp.1048-1065
- 中井政喜 (2007) 「魯迅「祝福」に関するノート (2)」 『野草』 (79), 34-54
- 中里見敬 (1994) 「魯迅「傷逝」に至る回想形式の軌跡」 『中国語学会報』 (46), 180-194
- 中島哲也 (2006) 『嫌われ松子の一生オフィシャルブック』 シネマ旬報社 237pp.
- 福田純子 (2004) 著者が語る注目の本『天使の代理人』 『日経ビジネス』 3, (16), 96-98
- 藤井省三 (2002) 『魯迅事典』 三省堂 326pp.
- 藤井省三 (2011) 『魯迅—東アジアを生きる文学』 岩波書店 244pp.
- 藤井省三 (2002) 「太宰治の『惜別』と竹内好の『魯迅』」 『国文学』 (6901), 56-65
- 藤井省三 (2012) 「松本清張の私小説と魯迅の「故郷」」 『文学界』 66, (6), 238-251
- 藤井省三 (2009) 「青豆と「阿Q正伝」の亡霊たち」 『1Q84 スタディーズ BOOK1』 若草書房 pp.24-37
- 橋本紀子 (2006) 「ポストブックレビュー著者に聞け『ランチブッフエ』」 『週刊ポスト』 38, (30), 125-127
- 松本清張 (2009) 『戦い続けた男の素顔 (松本清張傑作選)』 宮部みゆき撰 新潮社 pp.308
- 丸尾常喜 (1993) 『魯迅 人と鬼の葛藤』 岩波書店 pp.212-263
- 水川敬章 (2010) 「太宰治、リパッケージ、そして『嫌われ松子の一生』」 『季刊 iichiko』
- 魯迅 (2010) 『酒樓にて／非行』 藤井省三訳 光文社 285pp.
- 魯迅 (2009) 『故郷／阿Q正伝』 藤井省三訳 光文社 341pp.
- 山田宗樹 (2004) 『嫌われ松子の一生』 幻冬舎 上巻 389pp. 下巻 350pp.
- 山前讓 (1998) 「リズムカルに交通事故の謎に迫る『直線の死角』」 『本の旅人』 4, (7), 38-39